

江戸時代における三河吉田の狂歌

橘 敏 夫

はじめに

中世以来、京・大坂を中心とする上方で流行した狂歌は、江戸時代に入ると徐々に勢いが停滞した。享保期に由縁齋貞柳が登場すると盛り返したが、元禄文化から化政文化へという文化の中心地が移行し、その担い手が変化するという大勢をなぞるように、明和・安永期には江戸において展開し、田沼意次政権期における新しい思潮の一事例として天明期に全盛を迎えた。しかし、江戸幕府の寛政改革は、その勢いを減衰させた。政策基調に田沼期を否定する要素があったからであり、狂歌師と呼ばれる著名な狂歌作者たちが、諸藩の江戸詰役人、あるいは小身の旗本、江戸の町人だったことが関係しよう。改革を主導した老中松平定信の退任後も政治動向が維持されたことから、狂歌は次第に各地域にひろがることになった⁽¹⁾。

三河吉田の狂歌、あるいは狂歌作者については、佐藤閑翠・浜田啓介・粕谷宏紀氏による研究がある⁽²⁾。しかし、『豊橋市史』第2巻は、「吉田の文化」との項目をたて、文芸について言及しているが、小説・和歌・俳諧・漢詩文を対象とし、狂歌については取り上げていない⁽³⁾。執筆担当の近藤恒次氏は、狂歌関係の史料を収集していたし、同じく久曾神昇氏には渡辺崋山の狂歌に関する論稿がある⁽⁴⁾。したがって、全く関心がなかった訳ではなく、編集上の都合で、狂歌について述べるができなかったのであろう。

そこで小稿で、吉田の狂歌を取り上げ、その作者と作品を紹介することで、吉田の文化圏を明らかにし、今後の研究が進展するための契機としたい。その際、高橋章則氏による以下の指摘を参考にした⁽⁵⁾。それは、狂歌を政治・社会諷刺の落首とイメージすることは誤った教科書的な知識であるとの前提にたち、狂歌作者の年間行事としての活動を、①月次会の開催と、その成果をまとめた月次集の作成、②「側」が刊行する追悼集、判者資格獲得の披露集等の記念作品集に対する応募、③社寺等に対する狂歌額の奉納、浮世絵とともに作品を収めた狂歌摺物の作成・配布にまとめたうえで、地域文人発掘のツールが狂歌である、との位置付けである。これらをコンパクトに表現するなら、①は月例会、②は作品応募、③は広報活動となろう。

1 吉田における狂歌作者の初見

寛文6年(1666)5月刊行の『古今夷曲集』が載せる「作者之目録」のなかから地域別に集計された部分を利用すると、京都を含む山城に20名、大和に9名、和泉に11名、大坂を含む摂津

に78名、三河・相模に各1名、江戸を含む武蔵に5名、下総・近江に各1名、播磨に2名、周防に1名、長門に2名、紀伊に1名の名前がある⁽⁶⁾。このうち、三河の1名については「井上氏 旨治」とあるだけで、その素性は不明である。ここで挙げた作者の所在地から、上方狂歌はその名の通りの地位にあったと判断できよう。

吉田の狂歌作者が姿をみせる最初は、寛延2年(1749)6月に刊行された『狂歌秋の花』であろう⁽⁷⁾。同書は、上方狂歌の中興たる由縁齋貞柳の尾張名古屋門人が、師の十三回忌にあたる延享3年(1746)8月15日、同地の持福院で開催した追悼会を記念した狂歌集である。編者である永日庵其律の序は、次の通り。

やまと歌ハ、人の心をたねとして、よろづのことの葉となり、狂歌ハ世俗のこと葉をつゞりて、人の耳をよろこばしむ。禁色のとうゑんとどくと聞くほどに、引銀瓶のはでのおかしさは、しらぬ雲井のはやり事にして、定家卿のたはふれとなん。賤山がつの木こりうたまで、ミそ一文字によみなせるハ、またく栗のもとのこと葉にこそあなれ。我はた由縁齋貞柳翁の余風を学びて、とし比此門に遊ぶ。ことしハ古翁の十三回忌にあたれば、おなじ心の友どち追善の一首をつらねて、むかしを慕ふ(後略)

其律は、久野氏、橘屋与四郎を名乗り、城下呉服町の油商であった。宝暦10年(1760)10月に死去。狂歌に注力する以前は俳諧に凝り、茶では松尾流を極めた。貞柳の直門とする説、同門の秋園齋米都の弟子とする説があるが、年長の米都の指導をうけた後に、その師である貞柳に入門したということであろう⁽⁸⁾。

『狂歌秋の花』には、名古屋のほか、安芸広島から6人、三河吉田から2人、美濃関から9人が出詠した。その2人とは、高須晩井と高橋曲扇である。

由縁齋

十三年追悼

(中略)

三州吉田 高須氏晩井

おもひ出す涙に秋をかさね来て紙衣の袖をもみしほりけり

同 高橋氏曲扇

十三年になりたまひにし貞柳の流儀を汲みて狂哥手向くる

貞柳自身のほか、その師豊蔵坊信海、上方狂歌の祖たる松永貞徳の回顧作品を収録したうえで、大坂・広島・吉田・関の門人の作品が収録された「秋の花附録雑歌」の部にも晩井と曲扇の狂歌がある。ここは題詠である。

歳 旦

三州吉田

高須氏晩井

八旬の春にあふミの名所^{なごころ}ハ老その森や腰かゞミやま

同

同

高橋氏曲扇

花の春来るはよしのゝうるしかも皆せいひつを祝ひぬる代ハ

麦 秋

豊年のよろこびありや麦秋ハ作りの中の三番叟なり

七 夕

稀にあふ星の恋路ハ文月の梶の葉もじとさつしまいらせ候^(カ)

初 冬

きのふにはかふる寒さと引きかふる頭巾ぞ冬のはじめ也ける

この兩名が貞柳の直接の門人なのか、または其律のそれかは不明ながら、上方狂歌のなかでも大坂の狂歌が、名古屋を経由して吉田に入ったということになる。なお、この活動は、高橋章則氏が指摘した②にあたる。

『狂歌秋の花』から貞柳門が名古屋で流行し、吉田のようにさらに他地域へ浸透したことは確実である。その際、追悼集を編むことができる有力な門人が存在する、ということが必要であった。

2 大須賀鬼卵の指導をうける

安永8年(1779)春、大須賀鬼卵が妻夜燕を伴い吉田に来住し、宿内の元鍛冶町に住んだ。岸得蔵氏によれば⁽⁹⁾、河内佐太→摂津大坂→三河吉田→伊豆三島→駿河府中→遠江日坂と遍歴を繰り返した鬼卵は、茨田郡佐太村時代は伊奈文吾を名乗り、美濃加納藩永井氏の陣屋にあった。31歳になる安永3年、佐太天満宮に俳諧句集『佐太のわたり』を願主となり奉納した。その序文には、「集者伊奈氏ハ、河内国に千早振神の恵深き佐太の里に住て、画の面白を知り、連歌は連哥堂月々の席に列り、狂哥ハ柳門三世の号をうく。わきて誹諧ハ五流齋の代々に遊」んだ、とある。このなかで狂歌については、由縁齋貞柳の門下である栗柯亭木端にはじまる栗派に属し、鬼卵は栗杖亭を号した。「柳門三世」という表現は、貞柳-木端-鬼卵という門流を評してのことだ、という。

鬼卵は、大坂時代には大須賀周蔵と名乗り、妻の縁故がある吉田に移り、一瓢庵鬼卵と号した。天明2年(1782)3月に妻が亡くなると、吉田の五東齋こと古市木朶と遠江入野村の三山亭方壺が発起し、吉田大橋の下地村側のたもとに建てた忘婦庵に暮らした。

天明8年以前に鬼卵は吉田を離れ、駿河島田に移るが⁽¹⁰⁾、吉田時代は、同地を俳諧の一大拠点とした木朶との交流が深く、はじめに俳諧、ついで狂歌という流れで活動したようである⁽¹¹⁾。それは、鬼卵自らが判者として評点を付した狂歌帖のうち、『牟賀志濃勢幾(昔の関)』だけが吉田滞在中の天明4年2月の成立であり、『俱毛井濃賀里(雲井の雁)』は駿府時代の寛政11年(1799)9月、『代波井保志(夜這い星)』は日坂に移った享和元年(1801)12月となっているからである。

狂歌帖には、既に解説と翻刻があるので、ここでは書名の由来となった第一席の狂歌と作者、これに対する鬼卵の評点にかぎり取り上げ、狂歌作者の活動の一端に触れる⁽¹²⁾。このなかで『代波井保志』の第一席となった敦丸は、三河碧海郡新堀村の住人である⁽¹³⁾。

『牟賀志濃勢幾』 題「別後夜残」

雪明としらて別れの^{はおし}早^はけれと

うれしや消えんか君か足跡

志尹

雪のいとふ降夜、思ひこし人の雪の明に

まとひて帰れる跡に、夜ありぬるにと余、彼

嬉しくはおもへとも、君か足の跡の消えなんは

かなしき中に、よろこふ心ありて婦人の情よく

よみおゝせられて、夜残をよくかくしてたゝしく

詠入られたり、尤珍重々々、

此秀詠あまたあなる中に、巻の頭となすへき

詠もあらねは、まつ此詠を巻中の

第一とせん歎、
かの函谷関の空音に此雪も似侍れは、むかしの関と
一帖を題せんか、

『俱毛井濃賀里』 題「鹿声聞都」

真直にさし渡しては都まで

近くそとゝくさは鹿の声 菖雨

題意よくいひとらへて、縁語無理
ならず、けしきありて巧者の手際
をあらはされて、珍重々々々々、
巻中こたひはさせる詠もあらされは、
これを巻中の第一とせんか、

渡して近く届くなれば、雲井の厂と題せんか、

『代波井保志』 題「寄器物恋」

世の中の恋は思案のほかいにて

余所の部屋へも通ひこそすれ 敦丸

一首巧者に、縁語やすらかに哥に
おかしみあり、珍重々々々々、
此巻中なれ合て出来たれとも、巻頭に
なすへき詠もあらされは、此哥を巻中の
第一と申へしか、その部屋へ通ふ哥なれば、
よはい星と一帖を題せんもおかし、

『俱毛井濃賀里』で第一席となった菖雨の作品には、同じ題による別の作品があり、これに対する鬼卵の評点を示すと、菖雨が鬼卵の指導に最も応えたようだ。

うし若かいやうしみつに鹿の音の

しかともわかぬ此五条橋

栗柯亭風の

狂哥

佐藤閑翠『郷土人物年表』の享和2年の項目に、没年齢・住所・通称とともに、菖雨が鬼卵の後継者となったことが記されている⁽¹⁴⁾。

七月廿五日高須菖雨歿四十八才。本町ノ人、通称久太夫名正朗、狂歌ヲ大須賀鬼卵ニ学ビ其柳門社ヲ継承ス。

鬼卵の号を栗杖亭と紹介したが、寛政10年の『狂歌栗葉集』に収めた作品では、「盈果亭鬼卵」と名乗っていた⁽¹⁵⁾。『狂歌蓬か蔦』のなかで、菖雨は「盈果亭菖雨」と号した⁽¹⁶⁾。これは、師の号を継承したことの表現であろう。佐藤氏は出典を示すことなく、柳門社の継承を主張したが、これを裏付けとすることはできるであろう。つまり、貞柳門に属する鬼卵の指導をうけた吉田の狂歌は、菖雨という人材を得て、上方狂歌の影響下で独り立ちできる可能性があった。しかし当の菖雨が間もなく没するという不運に見舞われたのである。

現存する狂歌帖の存在から判断すると、吉田の狂歌作者の活動は、毎年の恒例とまでは断定できず、散発的である。それでも、高橋章則氏が挙げた①に準ずると判断できよう。

3 鬼卵から田鶴丸へ

享和元年（1801）12月成立の『代波井保志』には、「田雀丸」と署名する2作品があり、鬼卵はそれぞれに「准逸作」「まつきこゆ」と評点を付した。この狂歌帖について解説と翻刻をおこなった岸得蔵氏は、「田雀丸」を蘆辺田鶴丸と特定することに躊躇している⁽¹⁷⁾。しかし以下に述べるように、確定してもよいだろう。

田鶴丸は「享和二壬戌初春 三蔵楼蔵版、製本書林 名古屋本町七丁目 永楽屋東四郎」の刊記をもつ『狂歌蓬か罵』を刊行した。巻頭には、師である唐衣橋洲が同年7月18日に亡くなったからか、宿屋飯盛こと石川雅望の文章がある。自身で選集を編むことで、指導者となる能力があることを宣言したのであろう。同書のなかから吉田の狂歌作者を示すと次の通りである⁽¹⁸⁾。

○	三州吉田 豊橋欄干坊
就曲たやらな□□の花咲て楽しひもその中□の梅	千葉亭松景
池水の浪のあや織る青柳のいと永き日や通ふ春風	元来真好
ひき初る琴□も春の通ふ也東風□き組 ^(梅力) □かえの曲	^(近力) □家
正直のかうへふさがる恵方棚けさ歳徳の神もやとりて	芳果亭草主
水までもぬるむ入湯の初風呂に垢ぬけのした春ハ来にけり	如醉
春くれは袴そろへて福藁もかりそめならぬ庭にしき礼	臙常也
藁家まで楽しむ春ハ豊年の俵こいひきまハす猿曳	石巻山近
明そむる春は難波のあしからてよしと今朝ミるいセ暦哉	五石
大紋の袖にも匂ふ花の春広間へ通る梅の風折	真中
手折んと言名さけせし梅かえハ春の印を送る花の香	二階振袖
春風か送る匂ひを告鴉ほんのりしらむ梅かかあ々々	如仙
梅か枝にあし踏かた□々々啼鶯も声をはる風	^(雲) 溪□亭魯石
閉あひし雪の□着綻ひて春の日ましに□る糸遊	古井諸粉
我子にも緒つけ々々と賤の女のさもいそかしくおろす苗代	二谷園獅卜

春立て願ひもミつの朝熊山ふく一萬を祈る朔旦	上下朝生
鶯のはつ音ハうまき引鳥や猷立多き春のなかめに	五束斎
横客は横にしておけ春の哥証抛ハ霞む春の曙	一蓬
打むれてつむふり袖も白雪をいたしきなからミなわかな摘	素橘
おたやかに寒さの罪をさんけして経よミ鳥も春をミちひく	番蝶
ひいふうとはねつく声もあら玉の陰と陽との波をむくろし	盈果亭菖雨
佐保姫の下着は星の鹿子かや霞の袖の間たより出て	月窓亭南湖
門々へひきつれ遊ふ三味線のこまもつともに勇む春の日	垣元帯丸

竹も又をさなくミえて春雨のふり鼓□り笑のはつ花

鬼卵が寛政期における文化人を調査して享和3年に刊行した『東海道人物志』によれば、芳果亭草主は田中宗助、月窓亭南湖は富田源四郎で、ともに狂歌にすぐれ、溪雲亭魯石の木村安蔵は俳諧に秀でた⁽¹⁹⁾。木朶の名前もあり、俳諧作者のなかに俳諧を嗜みながら、狂歌にも挑むという姿勢があったようである。この他の人物は後掲する。

田鶴丸は、橘庵・三蔵楼と号した狂歌師で、本姓は岩田氏、近江屋伝兵衛を名乗る尾張名古屋の呉服町に住む染物屋で有松絞を製造した。寛政初年から江戸で唐衣橘洲に学んだ。橘庵の号は、作品を橘洲が激賞したことになみ、三蔵楼は住居による⁽²⁰⁾。

曲亭馬琴『羈旅漫録』によれば、往路の記事である「名古屋の評判」のなかには「狂歌は田鶴丸」とあり、復路の「名古屋の十五夜」では「十五日は雨ふりぬ。十六日名古屋三蔵楼にて」交歓した、とある⁽²¹⁾。

『狂歌蓬か寫』の刊行と、その後に偶然ではあるが、菖雨が亡くなったことが、吉田の狂歌作者が田鶴丸と深く関わる機縁となり、指導者が鬼卵から田鶴丸へと転換したのであろう。

江戸狂歌の流れを汲み、名古屋に住む田鶴丸との関係構築は、吉田の狂歌作者に新たな動向を生じさせた。このことが、結成時期は不明ながら、吉田豊水連の活動に繋がることになった。

享和2年4月12日は、桑楊庵頭光の7回忌であった。その追善集『狂歌萩古枝』が載せる「集中諸国作者」によれば（後掲表1）、狂歌作者は江戸を中心とする関東に移り、天明狂歌の全盛振りが消えきっていない状況を現出している。このなかで、三河の作者は59人を数えるから、流行地域としては上位に属することは確実であろう。さらに、『狂歌蓬か寫』から三河のなかでの狂歌作者の分布を示す（後掲表2）。全79名中、約3割が吉田の住人である。三河のなかでも群を抜いている。

4 曲亭馬琴の旅と三河吉田豊水連の活動

曲亭馬琴は、享和2年(1802)5～8月に上方に向かい、帰路には伊勢参宮を済ませ、江戸に帰った。この旅の成果が『羈旅漫録』である⁽²²⁾。同書によれば、往路では5月晦日～6月7日に吉田に滞在し、復路では7月17日に吉田を通過した。吉田に関しては、「吉田の花火」「吉田の飯盛 附銜妻」「よし田をか崎の妓楼 附矢矧はし」の記事があるほか、「伊勢の好事家 附人物の評」のなかに「三州吉田の浜名屋勘七はみづから扇亭と号す。所蔵の扇面数千本あり。これを一覽するに一日にして猶尽さず」とある。往路の滞在期間は7日であるので、浜名屋勘七のほかにも面会人がいたことは確実である。これについては、浜田啓介氏による『瀧澤家訪問往來人名簿』をもちいた研究がある⁽²³⁾。浜田氏は吉田の狂歌関係者と判断した人物だけを取り上げているが、ここでは全員を紹介する⁽²⁴⁾。

	(朱子) △三州		
一吉田豊橋川岸	川崎船問屋		
	豊橋元親ト号		佐藤新兵衛殿
一同	佐藤新兵衛殿隠居		
	欄干坊ト号		南澗老
一同札木町	問屋役人		
	桐茂ト号		尾村屋政右衛門殿
一同呉服町	隠居		
	垣本へた丸		(巖) 大竹七右衛門殿
一同鍛冶町	敦美亀成		高橋仁兵衛殿
一同	油屋		
	杜谷園素橋ト号		辻村十兵衛殿
一同魚町	橋躬老ト号		油屋彦十郎殿
一同呉服町	九文屋仁右衛門殿 仁蓼ト号		
	まで届べし 画家		木村政吉殿
一同横町	古着や		
	扇齋ト号 扇面家		浜名や勘七殿
(利) 一同研町	(哲) 諸子ト号		酒屋又右衛門殿
一同鍛冶町			土佐屋治太夫殿
一同御家中	矇漠ト号		
	(漢) 献作家		中山弥助殿
一同呉服町	医師		坂輪周イク老
一同鍛冶町	兎道茶藟ト号		平松甚六殿
一同田町	盲人		
	臚常成ト号		鈴木文令老
一同	医師		
	画家		加藤立參老
一同			餅好子 実名不知
一同	竹細工師		(鬼仙) きせん子

一同呉服町

俗家

旅人宿

古手や太兵衛殿

浜田氏は、馬琴が上記の情報を得ることができた背景として田鶴丸の紹介を推測している⁽²⁵⁾。『東海道人物志』との異同を示せば、辻村十兵衛は書家として紹介され、平石甚六は号が朝笑舎となっている⁽²⁶⁾。

高橋章則氏が示す活動③が、次に示す狂歌摺物である⁽²⁷⁾。これまで紹介してきた吉田の狂歌作者と三蔵楼こと田鶴丸の名があり、彫師として名がある不朽堂は、名古屋本町に住む版木師である⁽²⁸⁾。

三州吉田豊水連

垣元帯丸

古川も水はたやせすかけうつす桜や花の王義之か流

千葉松景

妹と脊の間をさけとも山桜わらひあふたる中よしの川

文々亭虻丸

黒かみの山の頭にみゆるより兀るをいとふ花のしら雲

七曲蟻人

から衣木々の梢もほころひて綿かとはかりみよし野のはな

朧常也

八雲たつよし野ハ花の七重八重八重垣つくる花の八重垣

柏古枝

山さくら花のなかめハよし野紙はるかとはかりみねの白雲

豊橋渡

これ計罪にはならし雲霧とうたかふて見る遠山の花

豊橋元親

ひと枝ハ手折てつとに結いれむ山辺に花の咲ミたれ髪

黄生子

弁慶のちからもあらハ花盛ぬすみとらなむ山寺のかね

豊橋欄干

花を見てうつかりへよむの吸筒と共にかたふく日こそおしけれ

三蔵楼

はなに出て宿は戸さゝぬみよし野や桜には世のいとまぬすめと

(朱印)「□□不朽堂彫」

この摺物の成立時期は、菖雨の作品がないことから、その没後のことになるだろう。一枚物で題はない。しかし、桜や吉野という語句があることから、『春興』という摺物であろう。

吉田豊水連に関しては『春興』と題した摺物もある⁽²⁹⁾。ここでは、最初の作品が盈果亭菖雨であるから、その生前の成立であろう。吉田のほかにも碧海郡新堀村の闇夜亭飛礫、同郡大岡村の文毫舎台卜、宝飯郡赤坂宿の百番亭外也の作品が含まれ、「古人」として湖夕亭達比と大名宿主の作品をおさめ、最後が三蔵楼田鶴丸である。

5 活躍の場を広げる

享和4年(1804)正月、『春興五十三駄之内』と題する葛飾北斎の東海道五十三次物のひとつが刊行され、このなかの「吉田」には、次の作品が掲載された⁽³⁰⁾。

年徳の神もあつまりますからによるつよし田の春そにきハふ	柏古枝
若みとりめしろと見へてよし田宿風におしあふ青柳のゑた	兎道茶筵
招かれてはなのよし田のこのもにあかぬ酒宴も袖のふりあひ	千葉亭松景
	垣元帯丸

二階から鹿子の袖にまねきなハ来てハとまらん春の梅か、

『春興五十三駄之内』は、碧海郡新堀村の浅倉庵三笑こと深見佐太郎が中心となった三河擣衣連との関係が指摘されている。さらに擣衣連は文化2年(1805)に『狂歌百人一首』を刊行する。北斎は三笑の依頼で作者の絵姿を描いている⁽³¹⁾。

さて、享和4年は2月に改元され、文化元年となる。この年、宿屋飯盛こと石川雅望が『草まくら』の旅に出た⁽³²⁾。これについては、粕谷宏紀氏の研究がある⁽³³⁾。

旅の行程は、4月9日に江戸を出立し、同月17・18日に吉田宿泊、上方を目指すが、途中の近江日野宿で病臥して3か月を療養して帰路についた。その途中で伊勢参りを済ませ、7月13日に吉田で宿泊し、同月23日に江戸に帰り着く、というものであった。吉田で主に応対したのは、垣元帯丸こと大嶽七右衛門と、欄干坊こと佐藤南潤であった。

〔往路〕

(文化元年4月)

十七日(中略)吉田の駅にいたり、大嶽なにがしがもとをとふらひて升屋といへる家にとまりぬ、大嶽ぬしやがてあざらけき鯛の魚もてきたり、しばし物がたりして帰りぬ、こゝに源兵衛といへる人ハもとよりしれる人なれば、子蘭ぬしとともにこゝに泊りをすることを告やりつ、さて湯ひきはて、源兵衛がり行て物がたりして帰りぬ、大嶽ぬし・南潤坊、そのほか人あまたとひきて、夜ふくるまでかたらひ、酒などのむ、

十八日おなじ所にあり、大嶽ぬしとくきたりて、やどりをかへて今ひとひとゞまれといふ、此日あしたより雨ふり風あらければ、出たつべきにあらねば、とゞまりをり、人々とひくることきのふのごとし、

十九日吉田をたちてゆく、人々おくりて四谷といへる所にてわかれぬ(後略)

〔復路〕

(文化元年8月)

十三日岡崎なる扇屋某が家をとふらふ、藤川なるミますやといへるにてひるげをくひ、戌の時ごろ吉田の駅にいる南潤ぬし・十蔵ぬしなど出むかへて升屋といふやどりにいざなひつ、大嶽ぬし・久兵衛ぬしなど、とりゞゝさまゞゝの物もて来てはなむけす、あすはひとひこゝにとゞまりて、すなどりなどし給へといふ、さもすべしなどいらへて、人々をかへしたるあとにて、清三郎がいへるハ、家にさしたる用あり、ことにいまだちからづき給ハざれば、ためらひとゞまるべきにあらざといふ、これによりて、又人をつかはして、くらきより出たちなむことをつぐ、

十四日卯の時に起て用意す、大嶽ぬしとく来りて送りす、くすしのことかけるふミもて来て、

病者のこゝろえにもならまし、ミちすがらこしの中にてよみつゝ行給へとて、かしあたへつ、此人はことにこゝろあつきまめやか人にぞありける、久兵衛ぬし・升屋のあるじなどともゞ、おくりきたり、このゆふべ浜松なるなべや某か家にやとりぬ、

大嶽七右衛門の手厚い心遣いに石川雅望が感動したことが記されている。大嶽の存在は有名になったようで、次のような事例もある。

『東海道中膝栗毛』が好評な十返舎一九は、その第五編「附言併凡例」のなかで、文化2年「神無月廿日あまり、六日の朝おもひたちて、東海道に杖をはせ、伊世路に赴き、内外の宮巡りして帰りしは、雪見月の五日になん」と、取材旅行に出たことを述べた。実際に第五編は、弥次郎と北八の伊勢参宮を描いている。その途中、弥次郎が香良洲明神への道標を眺めている挿絵では、次の狂歌を採用した。

三弐吉田
(弐)
柿元薔丸

正直の誓ひをたてん牛王なるからすのミヤの神をおかミて

さらに、伊勢一志郡雲出村に住む南瓜の胡麻汁宅を弥次郎・北八が訪れた際、弥次郎は十返舎一九を名乗るといふ悪戯をする。そこへ胡麻汁宛の手紙が届く。その文面に大嶽七右衛門が登場する⁽³⁴⁾。

鳥渡申上候。只今東都十返舎一九先生、私宅へ御着有之候。勿論名古屋連中、并吉田大嶽よりも書状参り申候。早速貴公御噂もいたし置候事故、追付貴宅江同道参上可致候間、右御案内申入置候。已上

また、四日市宿の旅籠屋における宿泊客の会話に「久しかぶりで、吉田の大竹へのたりこんで、おやまに浅柄のたばこ貰ひおつたが、みなすふてしもふた」とある⁽³⁵⁾。ここで挙げた大嶽七右衛門と十返舎一九との関係について、松田修氏の指摘をうけて粕谷宏紀氏は、大嶽を吉田宿の妓楼の隠居と推測している⁽³⁶⁾。『瀧澤家訪問往來人名簿』にあるように大嶽の住所は呉服町である。同町は吉田城の大手門に近く、しかも宿場の中心地である札木町とは離れた場所である⁽³⁷⁾。さらに、三世善徳氏によれば、大嶽は青竹新田の開発に関係した⁽³⁸⁾。したがって、大嶽の人物像については検討の予知があろう。一九の取材旅行における吉田での交流については、今後の課題である。

文化5年「六樹園宿屋飯盛先生判」をうたう『評判筆果報』が刊行された。吉田からは、星井舎梧繁・朧常也・垣元薔丸・真楯魚人・紫麦丸・豊橋元親が出詠した⁽³⁹⁾。このうち、星井舎梧繁は、「春之部」で第一席の「極上上吉」につぐ第二席の「大上上吉」をとった。

大上上吉 三州吉田 星井舎梧繁

花 帰れとの鐘にハ耳をふさきつゝ

あくことしらぬ花の夕はえ

[頭取] ひとひかりくらし、猶花の夕ばへにめでつゝ、かへらん事をいとへるさま見るがごとし、ことに詞のつゞけがら、たけありて、ほめやうもないほどの御佳作感じ入りました、[ひいき] わるい所があるならいつて見さつせへ、疵のない玉とハかういふ物だ、頭光にいひぶんがある、なぜ此哥を二枚めへ出したのだ、[頭取] 御尤々々、しかし難波津のわに、ことの外めづらしければ、巻頭にいたしました、先此たびハこれで御ふしやとう下されまし、[大ぜい] 四句めことに妙絶なり、花の夕ばえ見ごとく、

星井舎梧繁は、『東海道人物志』には「俳諧 号星井舎桐茂 富田政右衛門」とあり、『瀧澤家

訪問往来人名簿』には「^(吉田)一同札木町 問屋役人・桐茂ト号 尾村屋政右衛門殿」とある⁽⁴⁰⁾。一見すると、号が違っていているように感じるが、次のように解釈すれば納得できるだろう。つまり、梧桐が落葉高木のあおぎりをさすこと、繁茂が草木の枝葉がさかんに生長することをさすことから、同意の漢字について組み合わせをかねていると判断できるのである。ただし、「梧繁」は「ごはん」、「桐茂」は「とうも」と読むのであろう。結局、洒落た思いつきと評すべきものだろう。これは、高橋章則氏が指摘した②にあたる。

文化6年に石川雅望は、『狂歌百人一首 文化新撰』を刊行した⁽⁴¹⁾。その1番目が蘆辺田鶴丸で作品は「花鳥にいまめか覚て是まての朝寝くやしき春の曙」であり、35番目が^(高)牆元帯丸で「おもひきや曲らて直る生ふ竹の鳥指竿にならんものとは」であった。『草まくら』の旅以降、丁度田鶴丸が江戸に出たこともあり、吉田の狂歌は江戸との関係が深まり、満面開花した観を呈することになった。

おわりに

以上、吉田の狂歌について、作者と作品を取り上げた。要約として吉田の文化圏を位置付けし、課題についても提示したい。

吉田の狂歌作者が確認できるのは、寛延2年(1749)6月刊行の『狂歌秋の花』が最初である。これ以降については明確ではないが、徐々に作者が増加したようである。安永8年(1779)に大須賀鬼卵が吉田に来往すると、その指導のもとに狂歌が流行し、狂歌帖が作成された。

『狂歌秋の花』が由縁齋貞柳の尾張名古屋門人の刊行になること、大須賀鬼卵が貞柳門の流れを汲むことから、吉田の狂歌は、大坂を起点とし、名古屋を経由した文化圏に属したといえよう。鬼卵は名古屋と関係しないが、大坂という起点を変更する必要はないだろう。鬼卵の指導により後継の位置にあった高須菖雨の死がなければ、名古屋の影響から独立したかもしれない。

鬼卵が吉田を離れた後、江戸狂歌を学び、名古屋に居住していた蘆辺田鶴丸が吉田の狂歌と関係し、指導的立場となった。その契機が鬼卵が評点を付した狂歌帖への参加と、『狂歌蓬か鳶』の刊行であろう。これ以降の吉田の狂歌は、江戸を起点とし、名古屋を経由する文化圏に属したといえよう。

こうした状況下で、吉田豊水連という吉田独自の連中が活動し、狂歌摺物を刊行した。さらに、享和2年(1802)の曲亭馬琴、文化元年(1804)の石川雅望、同2年の十返舎一九といった江戸からの狂歌関係者の吉田への来訪、および交流は、田鶴丸が名古屋を離れて江戸にいたという事情も重なり、吉田の狂歌が直接、江戸狂歌と関係することになり、それまでの名古屋の影響から脱した、といえよう。

狂歌が、高橋章則氏が指摘するように地域文人発掘のツールであることは、吉田でも同様である。既に十返舎一九との交流について課題であることは指摘したが、『草まくら』中の吉田在住の人々についても不明である。さらに、周辺で活動する三河擣衣連や、東海道御油宿や赤坂宿の八橋連との関係を明らかにし、こうした連中とのネットワークについても検討しなければならないだろう。

註

- (1)野崎左文校訂『萬載狂歌集』「例言」(岩波書店、1941年)、浜田義一郎校注『狂歌集』日本古典文学大系57(岩波書店、1967年)「解説」を基に、筆者の見解を加えた。
- (2)佐藤閑翠「吉田における狂歌」(『史料漫録』26)、同「船町佐藤家歴代の文雅」(私家版、豊橋市中央図書館蔵)。浜田啓介「『羈旅漫録』の旅における狂歌壇的背景について」『文学』VOL.36(岩波書店、1968年)所収。粕谷宏紀「石川雅望の『草まくら』の旅」『高知大学学術研究報告』第25巻人文科学第1号所収、高知大学学術情報リポジトリで閲覧。
- (3)豊橋市史編輯委員会『豊橋市史』第2巻(豊橋市、1975年)878～914頁。
- (4)豊橋市美術博物館蔵近藤恒次氏収集「三河吉田豊水連」、久曾神昇「渡辺華山の狂歌について」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第13輯(愛知大学、1968年)所収。
- (5)高橋章則「地域文人発掘ツールとしての『狂歌』」東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料科学研究部門コラム2020年7月13日／最終更新日2022年9月27日。
- (6)塩村耕・高橋喜一校注『古今夷曲集』新日本古典文学大系61(岩波書店、1993年)473～477頁。
- (7)『狂歌秋の花全』名古屋市教育委員会『名古屋叢書』第14巻文学編(1)(名古屋市教育委員会、1961年)369～371・386頁。高橋曲扇の七夕を題とした狂歌の5句目につき、引用書は翻刻せずにその部分をそのまま模刻している。引用に際し、筆者の責任で「まいらせ候」と読み、(カ)と傍注した。
- (8)富田新之助「尾張の狂歌について」(六)『無閑之』第39号(むかしの会、1940年)、『愛知郷土文化史談 無閑之(むかし)』(愛知県郷土資料刊行会、1977年復刻)300～301頁。前掲註(7)『狂歌秋の花』368頁。
- (9)岸得蔵「栗杖亭鬼卵の生涯」『静岡女子短期大学紀要』第8号(静岡女子短期大学、1962年)所収。
- (10)近藤恒次氏が旧蔵していた前掲註(9)の岸得蔵「栗杖亭鬼卵の生涯」の抜刷41頁には、「天明八戊辰の「春興」(三河吉田)に、干飯の鳥追ふ梅の小庭かな 駿嶋田鬼卵」と書き込みがある(豊橋市中央図書館現蔵)。
- (11)前掲註(9)岸得蔵「栗杖亭鬼卵の生涯」39～40頁。
- (12)山杳誠「栗杖亭鬼卵評『狂歌牟賀志濃勢幾－解説と翻刻－』」『地方史静岡』第27号(地方史静岡刊行会、1999年)所収、岸得蔵校「鬼卵評点狂歌帖『俱毛井濃賀里』『代波井保志』」『資料翻刻第六集』(静岡女子短期大学国文研究室編、1966年)所収。これらの狂歌帖は、近藤恒次氏の旧蔵史料である。
- (13)『瀧澤家訪問往來人名簿』早稲田大学図書館古典籍データベースで閲覧。
- (14)佐藤又八(閑翠)『郷土人物年表』(閑翠書屋、1941年)31頁。
- (15)前掲註(12)岸得蔵校「鬼卵評点狂歌帖『俱毛井濃賀里』『代波井保志』」『資料翻刻第六集』1～2頁。
- (16)『狂歌蓬か寫』愛知教育大学図書館蔵、国書データベース(新日本古典総合データベース)で閲覧。
- (17)前掲註(12)岸得蔵校「鬼卵評点狂歌帖『俱毛井濃賀里』『代波井保志』」『資料翻刻第六集』5頁。
- (18)前掲註(16)『狂歌蓬か寫』。
- (19)大須賀鬼卵(陶山)「東海道人物志」近藤恒次編『三河文献集成』近世編(愛知県宝飯地方史編纂委員会、1965年)192頁。
- (20)『復刻版名古屋市史(人物編2)』(愛知県郷土資料刊行会、1980年)424頁、「金鱗九十九之塵」名古屋市教育委員会『名古屋叢書』第8巻地理編(3)(名古屋市教育委員会、1963年)253～255頁、「蘆邊田鶴丸」『森銚三著作集』第4巻(中央公論社、1973年)所収。
- (21)曲亭馬琴『羈旅漫録』日本隨筆大成新装版(第一期)1(吉川弘文館、1993年)188・291頁。
- (22)同上163～165・182～184・288頁。
- (23)前掲註(2)浜田啓介「『羈旅漫録』の旅における狂歌壇的背景について」281～282頁。
- (24)浜田氏が省略したのは、木村政吉・浜名や勘七・土佐屋治太夫・中山弥助・坂輪周イク・加藤立参・古手や太兵衛。

- (25)前掲註(2)浜田啓介「『羈旅漫録』の旅における狂歌壇の背景について」286頁。
- (26)前掲註(19)「東海道人物志」192～193頁。
- (27)豊橋市美術博物館蔵近藤恒次氏収集「三河吉田豊水連」。
- (28)前掲註(13)と同じ。
- (29)豊橋市二川宿本陣資料館『紅林家文書』郷土資料展Ⅴ(豊橋市二川宿本陣資料館、1996年)史料番号376。史料の閲覧は、愛知大学総合郷土研究所蔵写真版による。
- (30)永田生慈監修・解説『葛飾北斎東海道五十三次』(岩崎美術社、1994年)49頁。大阪府和泉市久保惣記念美術館デジタルミュージアムでも閲覧できる。
- (31)新編岡崎市史編集委員会『新編岡崎市史』近世学芸13(新編岡崎市史編さん委員会、1984年)710～714・716～721頁(鈴木勝忠氏執筆)。
- (32)石川雅望『草まくら』愛知県刈谷市中央図書館村上文庫。
- (33)前掲註(2)粕谷宏紀「石川雅望の『草まくら』の旅」6頁。
- (34)十返舎一九『東海道中膝栗毛』日本古典文学大系62、麻生磯次校注(岩波書店、1958年)231・265・270頁。引用に際し、ルビは省略した。
- (35)同上240頁。
- (36)松田修氏の指摘は「十返舎一九 東海道中膝栗毛」『松田修著作集』第2巻(右文書院、2002年)646頁の原注(3)。粕谷宏紀氏の推測は前掲註(2)「石川雅望の『草まくら』の旅」4頁。
- (37)「吉田宿東海道筋町別絵図呉服町(貞享5年)」豊橋市美術博物館『吉田城と城下町』(豊橋市美術博物館、2005年)77頁。同絵図から大嶽七右衛門を確認することはできない。
- (38)三世善徳「三河国吉田領青竹新田—その開発と経営—」『豊橋市美術博物館研究紀要』5号(豊橋市美術博物館、1996年)所収。
- (39)『評判筆果報』京都大学貴重資料デジタルアーカイブで閲覧。
- (40)前掲註(19)「東海道人物志」192頁、前掲註(13)『瀧澤家訪問往來人名簿』。

- (41)『狂歌百人一首』東京都立中央図書館蔵、国書データベース(新日本古典総合データベース)で閲覧。

表1 『狂歌萩古枝』が載せる「集中諸国作者」

地域	人数	地域	人数
山城	18	近江	4
大和	3	美濃	2
摂津	5	信濃	7
伊勢	6	上野	84
尾張	29	下野	35
三河	59	陸奥	71
遠江	2	出羽	14
駿河	1	加賀	2
甲斐	4	越中	24
武蔵	21	越後	3
常陸	32	丹波	1
下総	13	備後	1
		江戸	298

出典 『狂歌萩古枝』、東京都立中央図書館蔵。国書データベースにより閲覧。

表2 『狂歌蓬か鳶』が載せる三河の狂歌作者

場所	人数	場所	人数
吉田	23	大岡	4
新城	5	新堀	8
御油	4	平坂	1
元(本)宿	2	吉田(幡豆)	1
萩原	8	岡崎	8
深溝	3	土呂	1
佐久嶋	5	地(池)立	1
梅香坪	4	牛田	1

出典 『狂歌蓬か鳶』、愛知教育大学図書館蔵。国書データベースにより閲覧。人数の総数は、79名。